

県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う  
金剛寺遺跡発掘調査報告書 I

1985.12

滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに県道下豊浦・鷹飼線道路改良工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました。地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和 60 年 12 月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

## 例　　言

1. 本線は、県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う近江八幡市金剛寺町所在金剛寺遺跡の発掘調査報告書で、昭和60年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 調査は、滋賀県八日市土木事務所長の委託（再配当1.668.000円）により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会 文化部 文化財保護課

課長 市原 浩

課長補佐 中正輝彦

埋蔵文化財係長 林 博通

埋蔵文化財係技師 用田政晴

管理係主事 山本徳樹

財団法人 滋賀県文化財保護協会

理事長 南 光雄

事務局長 江波弥太郎

埋蔵文化財課長 近藤 滋

調査二係長 田中勝弘

総務課長 山下 弘

総務課主事 松本陽弘

総務課事務嘱託 上田美笑子

5. 本書の執筆は横田文雄が行い、田中勝弘が編集した。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

## 目 次

序 文	
例 言	
1. はじめに .....	2
2. 位置と環境 .....	2
3. 調査の経過 .....	2
4. 調査の結果	
イ. 遺 構 .....	4
ロ. 遺 物 .....	9
5. 小 結 .....	14
6. おわりに .....	15

## 挿図目次

第1図 位置図 .....	1
第2図 トレンチ配置図及び遺構分布図 .....	3
第3図 1・2・3 トレンチ平面実測図 .....	5～6
第4図 S D 1・4、S K 1・2、5 トレンチ平面図及び断面実測図 .....	7
第5図 出土遺物実測図(1) .....	10
第6図 出土遺物実測図(2) .....	14

## 図版目次

図版1. (上) 調査地全景（西より）

(下) 1 トレンチ全景（東より）

図版2. (上) S D 1、S D 4（東より）

(下) 2 トレンチ全景（東より）

図版3. (上) S D 3（西より）

(下) S K 1、S K 2（北より）

図版4. (上) S D 1 断面

(下) 3 トレンチ全景（東より）

図版5. (上) ピット群（西より）

(下) P 1（南より）

図版6. (上) トレンチ4（北より）

(下) トレンチ5（東より）



第1図 位置図(矢印)

## 1. はじめに

当遺跡は、平安時代を中心とした集落跡であり、さかのばって弥生時代までの遺物を出土している。当該地も遺跡範囲に含まれる可能性が極めて高かったのであるが、現県道が県立近江八幡工業高校、市立金田小学校の通学路となっているとともに、交通量が多く、道路拡幅、歩道の設置が急務となっているところであり、滋賀県の要請を受けて、急拠発掘調査を実施したものである。

## 2. 位置と環境（第1図）

金剛寺遺跡は、近江八幡市金剛寺町地先に所在する。今回の調査地点は、小字松ノ木、二十坪、流レの3字にまたがる。標高92~93mの平地に立地する。周辺は宅地化が進み、ほ場整備工事が実施されていて、従来の環境が激変しているが、旧来条里地割りを明瞭に残す地域であり、字名「二十坪」はその名残りを残すものである。

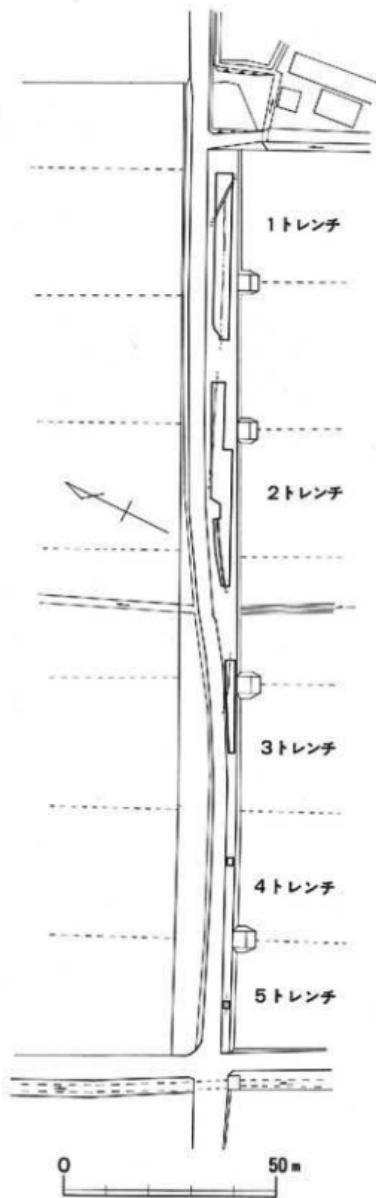
当遺跡はこれまで4回にわたる発掘調査が実施されている。昭和58年度<sup>①</sup>には、県営かんがい排水事業に伴い、今回調査地点の西部附近で調査が実施され、9世紀末~10世紀後半の掘立柱建物群が検出された。これら建物群は整然とした配置状況にあって、当時の荘官等有力農民の屋敷跡ではないかと推察されている。昭和59年度には、同じくかんがい排水事業及び県営ほ場整備事業に伴い、当該地の南側で調査が実施された。この時には、10世紀後半~11世紀の掘立柱建物3棟<sup>②</sup>、8世紀代の溝跡とそれと同方向に向く掘立柱建物4棟<sup>③</sup>が検出されている。昭和60年度には、当該地の北部、県立近江八幡工業高校敷地内で調査が実施され、遺構は検出されなかったが遺物包含層が確認され、遺跡の広がりを示す資料となっている。

以上から、金剛寺遺跡は、条里施行前後にまたがる集落跡であり、条里水田經營に関する集落の実態を解明する上に貴重な遺跡といえよう。

なお、今回の調査地点は、現状では唯一条里の旧態を残す県道下豊浦~鷹飼線に接つて南側にあたる。

## 3. 調査経過（第2図）

調査は、当初試掘とし、調査対象地東側4分の3の範囲で第1~3トレンチを設



第2図 トレンチ配置図及び造構分布図

定し、重機により表土を除去した。この結果、溝状遺構と遺物の出土を確認し、たちに本格調査に移行する計画をたて、関係機関との協議の結果、継続して発掘調査を実施することになった。

対象地域の西側4分1は、幅が極めて狭く、工事による歩道計画部分であって深掘をまぬがれる地域であるところから、人力による掘削で、2カ所のトレンチ（第4・5トレンチ）により遺構の有無を確認するにとどめた。

なお、本格調査を実施した範囲においても、現道の安全確保のため、現道から1m以上の余裕を残し、水田側についても、土置場の確保と工事による歩道計画部分に当るところから、トレンチの拡張は最少限にとどめた。また、調査終了後、安全確保のため、八日市土木事務所の指示に従い埋め戻しを行った。

#### 4. 調査結果（第3・4図）

##### イ. 遺構

検出した遺構は、溝状遺構4～5条、大型の上塙2基、ピット群等で、調査地域のはば全域に分布している。遺構検出面の標高は92.2m～92.6mで、ほぼ平坦である。

###### 1) 溝状遺構

###### (SD1)

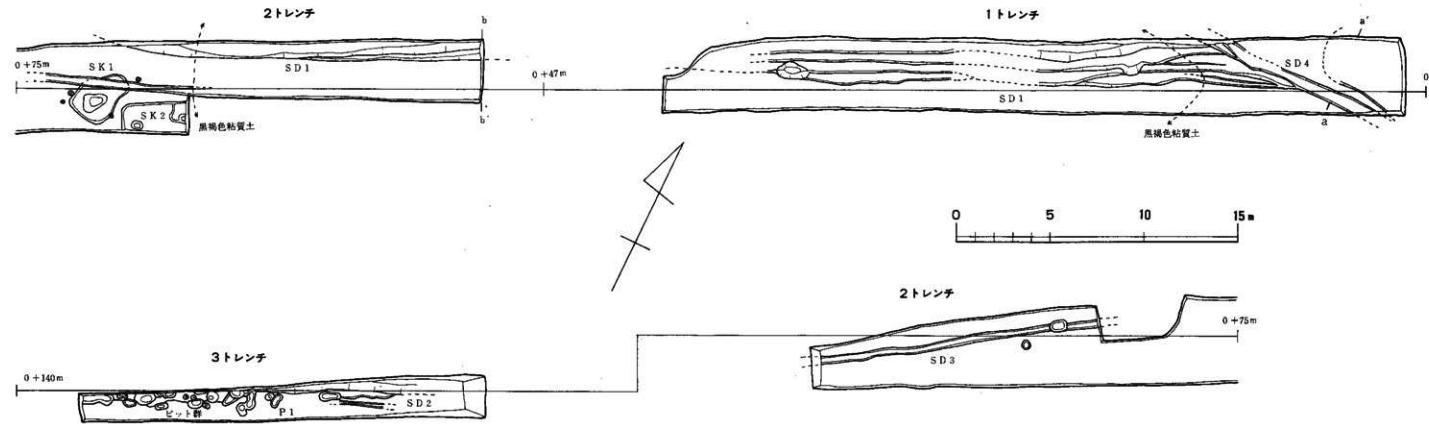
1トレンチから2トレンチの東半分にかけて、南側辺のみ検出した。南肩部側のみ検出し、幅や深さは不明である。およそN64°Eの方向に走る。溝跡は三段掘りで、二段目まで10～15cmと浅く、三段目を深く掘り下げている。溝内には茶褐色及至灰色粘質土が堆積し、若干の土器類を包含していた。

溝跡の北端は、SD4の東西溝を切るとともに、後世の擾乱を受けている。

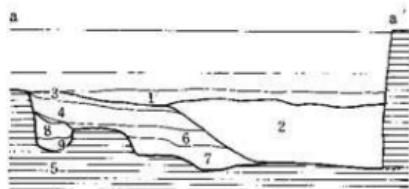
###### (SD2)

3トレンチの東半分で南肩部側を検出している。溝幅は不明であるが、溝内の最下層堆積土がグライ化しているところから、ほぼ底部と考えられる部分があり、ここでの深さは約80cm程を計る。掘り方は横断面V字状をなすものと思われる。溝内には、上層より茶褐色粘質土、褐色砂質土（黄灰色粘質土混入）、黄灰色砂質土（茶褐色土混入）の堆積が認められる。およそN65°Eの方向にあり、SD1とほぼ並行する。

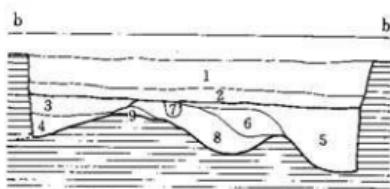
なお、溝内より土師器片が出土している。



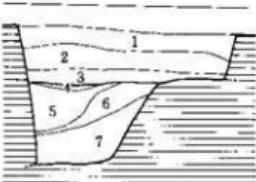
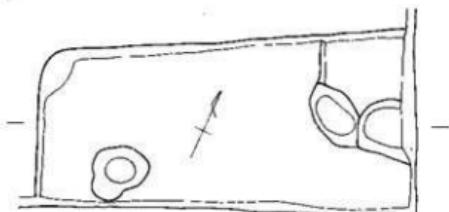
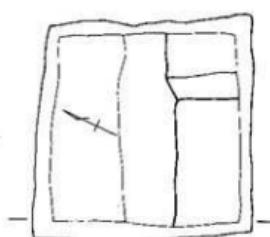
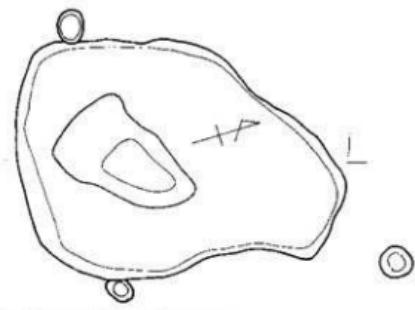
第3図 1・2・3トレンチ 平面実測図



- ① 暗茶褐色粘質土（被擾土）
- ② 茶褐色粘質土+砂礫混入（被擾土）
- ③ 明茶褐色粘質土
- ④ 暗灰褐色粘質土
- ⑤ ①と同じ
- ⑥ 暗灰褐色粘質土+砂混入
- ⑦ 暗灰色粘土+砂混入
- ⑧ 黑褐色粘質土
- ⑨ 黑褐色粘質土上に小礫混入



- ① 純土
- ② 床土
- ③ 暗茶褐色粘質土
- ④ ③に砂礫混入
- ⑤ 暗黑褐色粘質土
- ⑥ 暗褐灰色砂質土
- ⑦ 茶褐色粘質土
- ⑧ 黑褐色粘質土
- ⑨ 淡茶褐色粘質土



- ① 表土
- ② 純土
- ③ 淡灰黃色粘質土
- ④ 明茶褐色砂質土
- ⑤ ④に黃灰色土混入
- ⑥ ③に茶褐色土混入
- ⑦ ⑤に同じ

0 1 2 m

第4図 SD 1・4、SK 1・2、5 トレンチ平面及び断面実測図  
(レベルは標高93cm)

( S D 3 )

2トレンチの西半分で検出した溝跡である。溝幅約50cm、深さ15~20cmで、およそN58°Eの方向にある。暗茶褐色粘質土の堆積があり、土師器、黒色土器等の破片が出土している。

( S D 4 )

1トレンチの東端で、S D 1に切られた状況で検出している。幅70~80cm、深さ58cmを計り、ほぼ東西方向に走る。

2) 土塹 (第4図)

( S K 1 )

2トレンチの中央附近で検出したもので、梢円形状の浅いものである。長径3m、短径2.2mで、中央部がやや窪み、最深部は約30cmを計る。塙内には、上層に黒褐色粘質土、下層に黄灰色土の混入した黒褐色粘質土の堆積が認められ、須恵器の杯、土師器片などが出土した。

なお、土塙の肩部に接って3基の小ピットが検出されたが、土塙との関係は明瞭でない。

( S K 2 )

2トレンチの中央附近、S K 1の東側で検出している。北及び西辺部分を検出したのにとどまるが、二辺とも直線的で直交しており、方形のプランを呈する可能性がある。深さは10cm程度で、塙底は水平であるが起伏が著しい。壁溝や柱穴状のピット等は検出できなかったが、堅穴式住居跡の可能性もある。

塙内からは須恵器片、土師器片が出土している。

3) ピット群

3トレンチの西半分で多数のピットを検出している。ピット群は溝肩部附近で掘り込まれた状況で、連接して検出されている。ピットの形状や規模は不統一で、柱痕等も検出できなかった。これらのピット群からは土師器、黒色土器、青磁、白磁等の破片が出土しているが、P 1からは完形の土師器皿が塙底から出土し、また、黒色土器が塙肩部より流れ落ちた状況で出土している。

4) 4トレンチ

遺構の有無を確認するためのトレンチであるが、土師器片、瓦質三足釜の脚部片等を出土する包含層を確認した。

## 5) 5トレンチ

ここでは、表土下約50cmで黄灰色粘質の地山土を切り込む溝状の掘り込みを検出した。最深部で、深さ約80cmを計る。

### 口、遺物(第5・6図)

#### 1) SD1出土遺物(第5図)

##### (土師器皿)

(1)、(6)はいわゆるヘソ皿である。(1)は口縁端部が小さくつまみ出され、底面突出部が鋭く瓜痕を残す。(6)は口縁部の外反が強く外面に指オサエ痕を残す。復原口径は(1)-6cm、(6)-6.2cmを測る。

(2)は口縁端部を外反させた後、やや上方につまみ出す。復原口径は13.2cmを測る。

(7)・(8)は器壁が薄く、立ち上がりが長い。大皿の形態をもつものと考えられる。

(9)は器壁が厚く二段ナデ手法をもつものである。口縁端部はやや外反気味である。

(20)・(21)は底部外面に指オサエ痕を残し、立ち上がり部外面に一段強いヨコナデを施す。(22)も一段ナデ手法をもつが端部に面取りがみられる。(3)・(4)・(5)は調整手法が不明瞭である。

また、(4)が淡褐色、(5)が暗灰褐色を呈すほかは、これらはすべて白色～褐白色の土器である。

##### (弥生式土器)

(17)は受口状口縁である。端部の立ち上がりは短く、外側面下部にヘラ状工具で刻み目を施す。

(18)は器台の口縁部である。端部外側面に竹管文のある円形の貼付け文を施す。

(19)は壺の口縁部と考えられる。

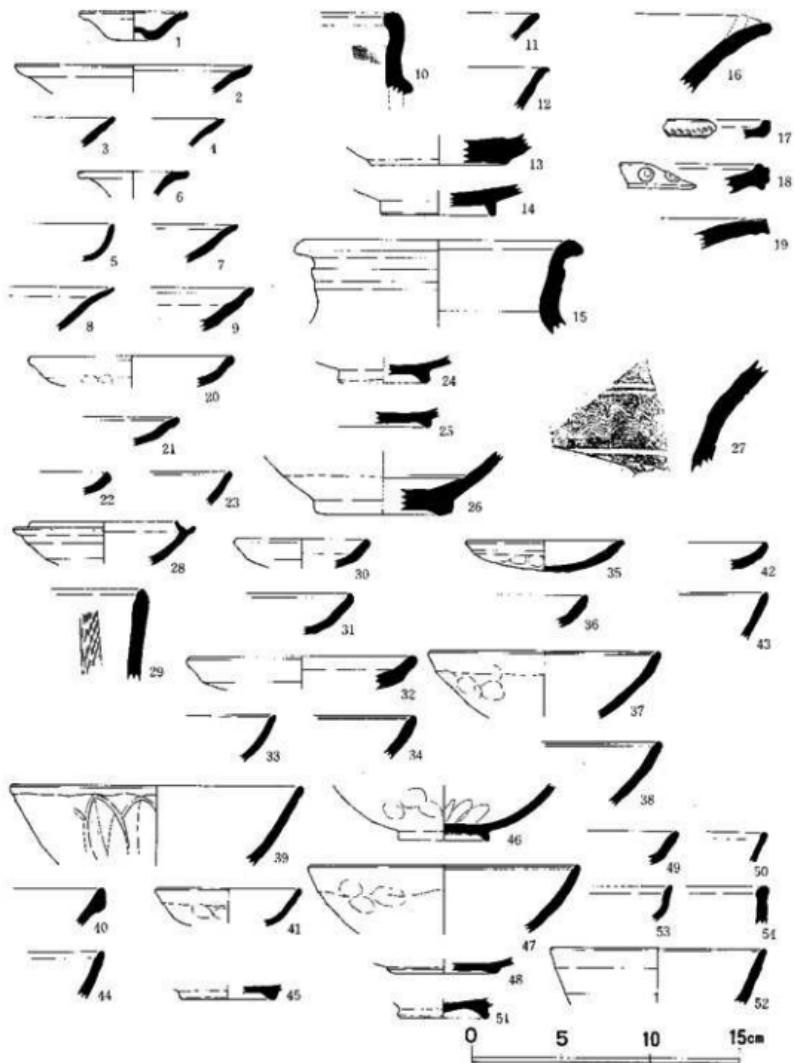
##### (その他)

(10)は土師器の羽釜の口縁部である。ツバは極めて小さく内面にかすかな横方向のハケ目がみられる。

(11)は陶器皿の口縁部である。胎土は乳白色、釉調は濃黄緑色を呈し、瀬戸、美濃系のものと考えられる。

(12)は白磁碗の口縁部である。明白灰色を呈し、端部を強く外反させるものである。

(13)はいわゆる灰釉系山茶壺の底部であり、器壁は厚く胎土は砂粒を多く含み粗い。



第5図 出土遺物実測図 (1)

1~19: SD 1 (1トレンチ), 20~27: SD 1 (2トレンチ), 28~29: SK 1,  
30~34: SD 3, 35~38: P 1, 39~41: 3トレンチビット群, 42~45: SD 2,  
46~51: 2トレンチ包含層, 52~54: 採取品

粗雑に貼り付けられた高台部にはモミ痕がみられる。

(10)は灰釉陶器皿である。比較的安定した高台を貼り付け、内面のみ施釉されている。素地は灰白色、釉調は淡緑灰色を呈す。底部内面は重ね焼きの際の高台痕が残る。

(11)は陶器壺の口縁である。胎土に長石粒の吹き出しが多く見られ、表面は青褐色に焼け締まる。玉縁状の口縁は端部をややつまみ出す。信楽焼と考えられる。復原口径16.1cmを測る。

(12)は陶器片口鉢の口縁である。赤褐色によく焼け締まり、内面は黄緑色の自然釉がかかること。

(13)・(14)は黒色土器片である。いずれも磨滅が著しく調整手法は不明である。

(15)は土師器塊か皿の底部である。

(16)は白磁塊の底部である。内面と外面上半部に釉薬がかけられる。胎土は精良で、素地の色は白灰色、釉調はやや青味をおびた白色を呈す。底部内面にはヘラで一条の沈線がひかれる。高台は逆台形に削り出される。

(17)は須恵器の甕口縁と考えられる。青灰色によく焼け締まり、2条と1条の沈線の間に7条のクシ状工具で波状文が描かれる。

#### (時 期)

S D 1 出土遺物のうち比較的時期決定の容易なものをとり上げてみる。(13)の山茶塙は高台の消滅をみる直前のもので13世紀中頃から後半のものと考えられる<sup>④</sup>。(10)の灰釉陶器皿は11世紀代のものであろう。(16)の輸入白磁は高台の形態と底部付近の内面に沈線をもつことから、大宰府出土陶磁器の型式分類案<sup>⑤</sup>の白磁IV-1類に比定できる。

(17)・(18)・(19)は弥生時代後期後葉に該当する。

また土師器皿について、図示したものの大半は断面のみのものであり、これらの例をもって明確な時期決定は不可能と考える。これまでのいくつかの研究成果でも、土師器皿の形態別出現比率（セット関係）でもって相対年代を比定しており、呈示した今回の資料では不足を生じるものである。しかし形態的に出現期のある程度限定されるものをとり上げてみると、ほぼ2時期に分類できる。つまり、平安時代後期～鎌倉時代に比定できる一群（9、20、21、22）と室町時代中期～後期に比定できる一群（1、2、6、7、8）である。

## 2) SK 1 出土遺物（第5図）

（須恵器）

(28)は須恵器の壺身である。青灰色によく焼け締まり内外面をヨコナデ仕上げする。立ち上がりは短かく、内傾する。復原口径8.3cmを測る。

（時 期）

(28)は大阪府陶邑古窯跡群のTK217型式<sup>⑨</sup>に併行するものと考えられ7世紀初頭頃のものであるだろう。

## 3) SD 3 出土遺物（第5図）

（土師器）

(30)・(31)・(32)は土師器皿である。(30)・(31)は口縁外面にやや強い一段ナデ手法を施すものである。復原口径はそれぞれ7.6cm、12.8cmを測る。(31)は口縁端部をナデて立ち上げらせるものである。

(33)・(34)は黒色土器である。ともに口縁端部内面に沈線をもつが、磨減が著しく調整手法は不明である。

（時 期）

(30)・(31)・(32)はいずれも平安時代末期～鎌倉時代の間に収まるものであろう<sup>⑩</sup>。

## 4) PI 1 出土遺物（第5図）

（土師器）

(35)・(36)は土師器皿である。(35)は完形品であり、ピットの埴底付近で水平な状態で出土した。口径は8.8cmを測り、胎土は白褐色で焼成も良好である。口縁部外面に一段ナデを施し、底部は指オサエ痕を残す。

（黒色土器）

(37)・(38)は黒色土器壺である。いずれも口縁端部内面に一条の沈線をもつ。体部外面に指オサエ痕を残し、口縁外面にヨコナデを施す。暗文は不明であるが、(38)の口縁外面でわずかにヘラ磨きが認められる。

（時 期）

(35)の土師器皿は平安時代末期のものと考えられる。(37)・(38)の黒色土器は12世紀後半のものであるだろう<sup>⑪</sup>。

## 5) 3トレンチピット群出土遺物

（磁 器）

(4)は輸入青磁塊である。釉調は青味を帯びた緑色を呈す。体部外面に鍋のある蓮弁文を施す。このタイプは大宰府出土陶磁器の型式分類案によると、青磁I-5、b類に属するものと考えられる。

(40)は口縁部を玉縁状にする白磁塊である。

(土師器)

(41)は上師器皿である。底部外面に指オサエを残し、口縁外面に一段ナデを施す。

6) S D 2 出土遺物 (第5図)

(土師器)

(42)は土師器皿である。

(黒色土器)

(43)・(44)・(45)は黒色土器塊である。いずれも内外とも磨滅しており調整手法は不明である。

7) 2トレンチ包含層出土遺物 (第5図)

(黒色土器)

(46)・(47)・(48)・(49)は黒色土器である。(46)は底部と体部下半を残し、内面でわずかに暗文が認められる。(47)は体部上半部のみの残存で復原口径15.1cmを測る。体部は丸味をもって立ち上がり外面に指オサエ痕を残す。

(土師器)

(50)は一段ナデ手法をもつ土師器皿である。

(磁器)

(51)は白磁の口縁部である。明灰白色を呈す。

(時期)

(46)・(47)は体部に丸味をもち、外面は口縁近くまで指オサエ痕を残す。12世紀後半～13世紀前半に比定できるものと考えられる<sup>⑧</sup>。

8) 1・2・3トレンチ上げ土中採集遺物 (第5図)

(52)・(53)は須恵器の杯身である。ともに胎土は精良で淡青灰色を呈す。(52)は体部内外ともヨコナナデ仕上げを施す。(53)は口縁部外面に強いヨコナナデを施し、やや外反する。

(54)は中世陶器の口縁部である。胎土はきめ細かく白褐色で、釉調は淡黄緑色を呈す。瀬戸、美濃系の陶器と考えられる。

(55)は須恵器である。淡青灰色を呈し硬質である。外面に一条の沈線と、その下に波状文が描かれる。

#### 9) 4 トレンチ包含層出土遺物（第6図）

（瓦質土器）

(56)は瓦器の三足釜脚部である。胎土は砂粒を含み粗く、色は灰黒色を呈す。



第6図 出土遺物実測図(2)

## 5. 小 結

今回の調査で検出した遺構は、並行するとと思われる溝状遺構2条(S D 1・2)、S D 1、S D 2の間で、それらと並行する小溝1条(S D 3)、S D 1に切り込まれ、東西方向に走る溝1条(S D 4)、堅穴式住居跡の可能性も残る土塙1基(S K 2)、椿円形土塙(S K 1)の他多数の小ピットである。S K 1・2は、6世紀後半から7世紀前半のもので、当該地では最古の遺構である。S D 1・2では、弥生時代の上器類を除くと、平安時代末期から室町時代後期頃までの上器類を出土しており、溝の開削時期及び埋没時期を推察することが可能である。S D 3は、黒色土器が出土しており、S D 1・2より先行する可能性がある。S D 4はS D 1に切られており、その先後関係は明瞭である。3トレンチのピット群は、P 1が平安末期であり、他のものはこの頃のものから室町時代までのものが混在している。S D 1・2の出土遺物の時期幅と並行しており、関連する遺構と考えてよい。

以上から、当該地では、弥生時代後期の土器類、古墳時代後期の土塙、平安時代末期から室町時代後期の溝状遺構及びピット群、及びそれに先行する溝状遺構を検出したことになる。遺構の時期幅はかっての調査結果と共通するが、今回の調査では弥生時代後期の土器類が出土しており、金剛寺遺跡に新たな知見を加えることになった。

今回の調査地域は狭長な部分で、検出した遺構の全容の知れるものが少なく、遺構の各々の性格を究明することはむつかしいが、その中で、4条の溝状遺構は条里制との関連を伺い得るものであろう。SD1、SD2はN64~65度Eの方向にあって、ほぼ並行しており、かつ、坪界に当る部分にあって条里方向と並行している。SD1とSD2に若干の先後関係があるのか、あるいは同時存在したものかどうかは、今回の調査では明確にできないが、両溝ではさまれていると考える部分にはほとんど同時代の遺構が分布せず、里道の側溝と考えることも可能である。SD4については、明らかにSD1に先行するものであるが、その方向がほぼ東西方向にあるところから、各所で散見する条里施行前の古地割の存在が推定される。SD4については、SD1・2の時期にも並行するものであるが、浅く、小溝であり、他の溝状遺構とは性格を異にするものであろう。上記の性格が妥当とするなら、当該地附近には、条里施行前の南北地割りを持つ古地割りがあり、平安時代末頃に、条里溝が開削され条里水田が開発されたが、検出した溝跡は室町時代後期に埋没しており、あるいはこの頃に条里水田の再開発のあったことが推定できる。

## 6. おわりに

今回は狭い範囲の調査であったが、金剛寺遺跡の性格の一端が知れるとともに、条里開発に関する資料を呈示してくれたものと考える。

注

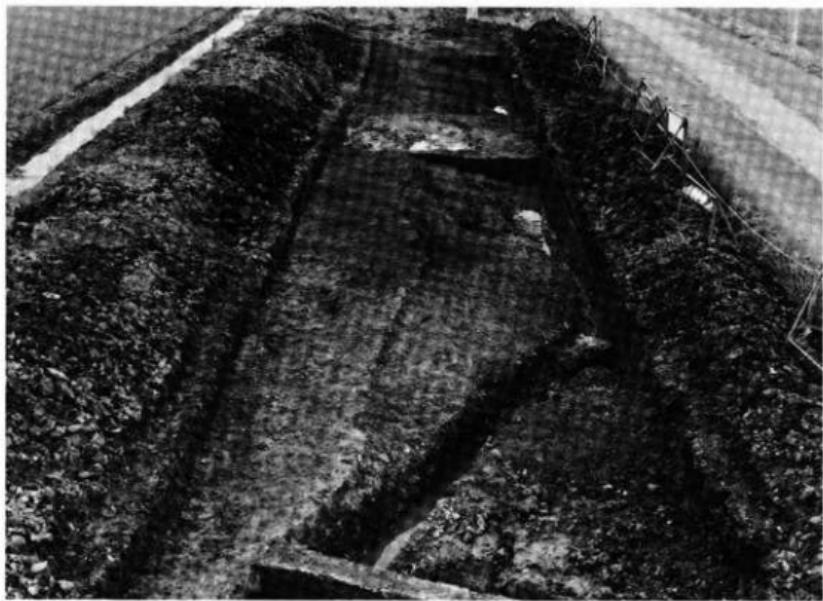
- ① 近藤 滋 「滋賀文化財だより A86」  
(財滋賀県文化財保護協会 1984)
- ② 田路 正幸 「県営かんがい排水事業関連発掘調査報告書II-1」  
(滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1985)
- ③ 田路正幸氏の教示による。
- ④ 藤澤良祐 「瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要I」  
(瀬戸市歴史民俗資料館 1982)
- ⑤ 横田賢資郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」  
(『九州歴史資料館研究論集』 1975)
- ⑥ 泉 拓良 「京都大学埋蔵文化財調査報告II」  
(京都大学埋蔵文化財センター 1981)
- 横田洋三 「平安京左京五条三坊十五町」(財古代学協会 1981)
- ⑦ 田辺昭三 「陶邑古窯址群I」(平安学園考古学クラブ 1966)
- ⑧ 注⑥に同じ
- ⑨ 大橋信弥 「手原遺跡発掘調査報告書」  
(栗東町教育委員会・栗東町埋蔵文化財調査団 1981)



調査地全景（西より）



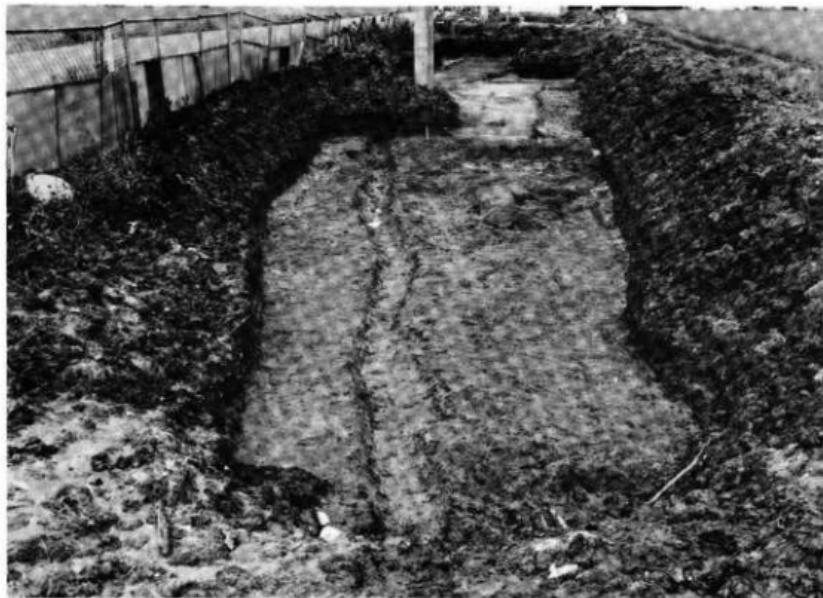
1 トレンチ全景（東より）



SD1、SD4（東より）



2 トレンチ全景（東より）



SD 3 (西より)



SK 1、SK 2 (北より)



S D 1 断面



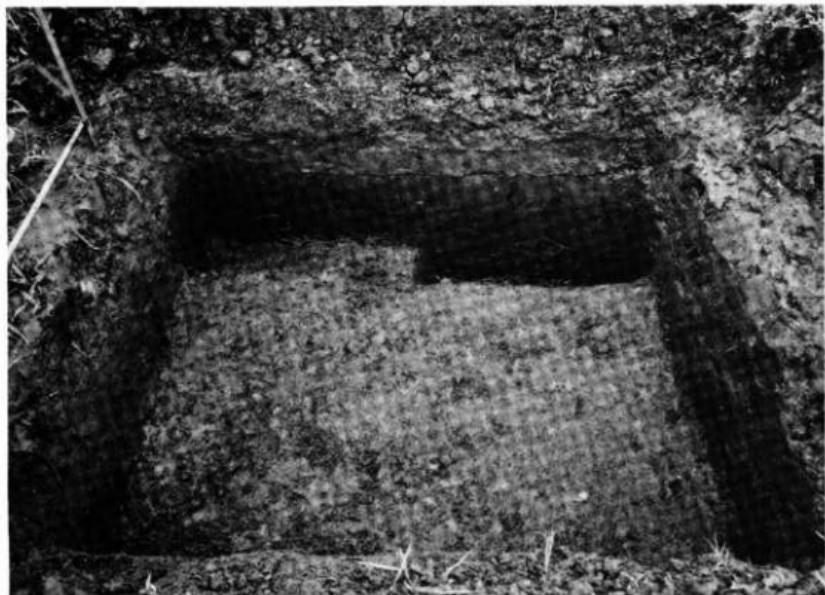
3 トレンチ全景（東より）



ピット群（西より）



P 1 (南より)



トレンチ4（北より）



トレンチ5（東より）

---

昭和60年12月

県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う

金剛寺遺跡発掘調査報告書 I

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財  
保護課

大津市京町 4 丁目 1 番 1 号

Tel (0775) 24-1121(内線2536)

財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel (0775) 48-9780・48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社

長浜市朝日町 22-16

Tel (0749) 63-1441(代)

---